2018年度ＧＴセミナー
ＧＴサミット2018②
2018.8.20～8.21

第７９号　２０１８年９月３日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ　奥山卓矢

ＧＴサミット2018

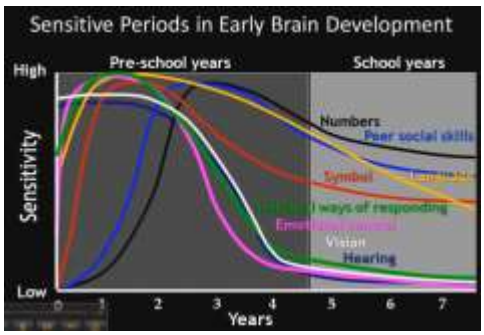
2018年８月20日～21日にＧＴサミット2018が
東京都中央区のコングレスクエア日本橋にて開催しました。

全国から100名程の先生方が集まり、園見学や各地域実践発表、
意見交換会を２日間に渡り行いました。

２日目の講演では、ＧＴ代表の藤森先生から、
「新しい子ども観」をテーマに３時間に渡って、
ご講演していただきました。

●2018年度セミナーレポート報告

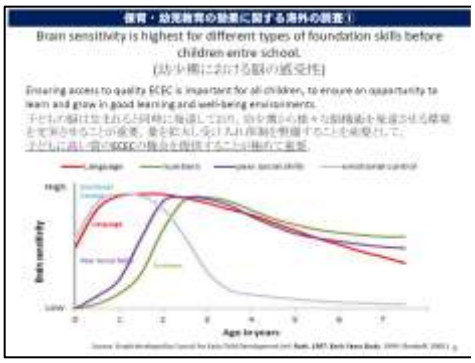
第47回保育環境セミナー：本誌、第72～73号
※今年度の開催した保育環境セミナーの藤森先生の講演録や
Q&Aの議事録は上記のレポートからお読み頂けます。



Dr.Clyde Hertzman
出所：https://www.youtube.com/
watch?v=M89VFIk4D-s

●今後のセミナースケジュール

第48回保育環境セミナー	2018年９月３日～５日
第49回保育環境セミナー	2018年10月15日～17日
第14回リーダー研修	2018年11月26日～28日
職域別見守る保育セミナー	2019年１月21日～22日



指針改定でも使用された脳機能拡大のグラフ

セミナーを終えて思うこと

猛烈な暑さが続いた８月。

東京 日本橋にあるセミナー会場では、外の熱さに負けない位の保育に情熱を掛ける先生方が全国から集まり、２日間に渡って、セミナーを開催しました。

今回、ＧＴ代表の藤森先生には、３時間に渡ってご講演をして頂きました。（講演の議事録は次ページに掲載しています。）

最近の講演の中でよく登場する、脳機能拡大のグラフ。
保育所保育指針の改定の元になったグラフですが、今回は日本語訳されたグラフではなく、大元の原文ではどのような内容が書かれているのかから藤森先生の解説の元、見ていきました。

脳機能の拡大のグラフからも、乳幼児期の重要性や大切さを感じていましたが、その大元の原文から考えるということは考えもしていませんでした。

藤森先生がよく話される、そもそも論ではないですが、誰かの考え方が反映された日本語訳ではなく、原文を見るとこれまで見てきたグラフよりもさらに細かな情報が載っていることも感じました。

前ページの左下にＵＲＬを掲載していますので、是非そちらも併せてご確認ください。

暑かった８月も終わり９月を迎えました。

ですが保育の熱は冷めることなく、園に戻った先生方は保育熱を増しているのかもしれない、セミナーを終えてそんなことを思いました。

（報告者：株式会社カグヤ　奥山卓矢）

●過去のバックナンバー

第７６号
保育環境セミナーＱ＆Ａ
第７７号
古民家『聴福庵』３年目の夏
第７８号
ＧＴサミット 2018①
http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/

caguya
〒161-0023
東京都新宿区西新宿 3-2-11　新宿三井ビルディング２号館 10 階
Tel:03-5909-7155
毎週月曜日に配信しています。
ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ　奥山卓矢

メールマガジンのご登録は、
ＱＲコードからお願いします。

ＧＴサミット 2018

新しい子ども観 ―最新の研究による子ども観―

―はじめに―

今、睡眠がどういう意味か睡育と言われていて、熊本でもそういう勉強をしようと言って、熊本大学の先生が中心となって三池先生が、睡育協議会を立ち上げた。何故か私がその評議員になっていて、ＧＴメンバーに参加してほしいからだと思うのだが、悩ましい内容です。何故かというと、保育園は、お昼寝があるので、どういう位置づけにするのか。もう一つが今の発達障害を含めて、不登校などは睡眠障害ということで、20 時前くらいに寝るようにという中で、20 時半までやっている保育園としては、それを言われてもな、ということもあり悩ましい。3 歳以上はお昼寝は寝かせる必要がないと睡育では言うが、それでは職員の休憩時間が取れないなど、保育園の実像とは難しいところがあり、いろいろ見直される中で、私が最近思っていることを話します。

―最近思っていること―

昨日、長澤先生が「環境を通して行うのは 63 年でしたっけ？」と言ったときに、誰か「平成元年」と言ってくれたらいいのにと思ったが、平成元年に打ち出され、平成２年に指針の中でも「環境を通して」と謳われるようになり、基本になった。私は環境を通してということはどういうことなのか、自ら環境に働きかけて、相互作用で発達するとは。指針に書かれている発達がどういう意味なのか考えた。ここが最初、私が取り組もうとしている一つだが、今日『見守る保育』の本を持ってきているが、ネットでは高くて買えない。『見守る保育』の構成を見てもらうと分かるが、１章には「見守る」の「見る」とはどういうことか。「守る」とは、何かが書かれている。「見守る保育」と言うと、見る方を中心に考えてしまうが、どこまで見て、介入するかということがあるが、「見る」と「守る」が大事。「見る」というのも、どういう英語を使うかということがあり、視覚に見えているということではなく、発達を見る、子どもの姿を見る。それを見ることで、どこから介入するかを考えるのが守る。そういうことが１章に書いてある。２章には、「環境を通して」という意味を書いてあり、最初によく言われる３つの環境。子どもに影響するのは様々な環境だが、大きく３つと言われ、１つ目が人。２つ目が物。３つ目が空間。その環境がどうあるべきかを２章に書いている。人という環境が基本的によく保育士という人がいるが、その本にいくつか書いている。園として大事なのは、子ども同士がいる環境。何故かというと、保育園ならではだから。もちろん大人と子どもの関係もあるが、その関係は家でも出来るが、子ども同士の関係はあまりできない。そして、先生との関係、地域との関係が人との環境。物は教材・教具。空間は屋内外の環境。保育室の環境などがあります。そして、３つの環境をどう作っていくかがあって、環境設定があるが、その中で子どもがどう動くか。私の『見守る保育』の２章をよく読んでもらうと分かるが、３つの環境があり、乳児と幼児に分かれ、それぞれ３つの関係があります。それから保育の場面の中で、私がその本に書いたのが保育における３つの関係。それから、登降園の環境、食事の環境、休息の場面の環境と、保育室と内外の４つの環境がある。乳児と幼児に分かれ。乳児における４つの場面の３つの関係を見直すことでということで、その関係を評価として書いている。

―評価について―

まず、評価がいつでも課題になるが、私たちを悩ませる評価が監査。監査は悩ましいことがあって、頭に来ても我慢しないといけないところもある。監査の書類主義の監査はおかしいと思う。だからと言って、言ったところでどうにもならないこともある。ただ、いらないというつもりはない。それは、税金を貰っているとしたら当然そこをちゃんとした使い方をするべきだと思います。これを役所が、不備があるとか失敗したことを、不正をしたと捉えることがうちの園であって、前回の監査で、郵便の支払いの手数料 400 いくら相手が請求書に含まれて入っていたが、その振り込みをこちらが負担してしまい、二重払いになってしまい後で気づいて戻したが、年度末に気付いて戻したものだから、監査の人が不正

支出？と言ってきたが、そこで監査の人に「補助金はいい保育をするために補助金を出すのに、変な保育をしている方が不正支出ですよ」と言った。変な保育をしているところに指摘をしてほしいと言った。そういう細かいことを言われる監査もある。本当の内容が分からないので、第三者評価を作り被らないところを見ようと作ったが、なかなか難しいところがある。公立の園長だった人が評価に来ると、まず異年齢はよくないと指摘されたこともある。保育内容も見る人が変だと当然そうなる。自己評価が必要と指針に書かれている。保育での評価の歴史は古く、園長による自己評価と保育士の自己評価がある。保育士の方に指針に沿った保育をしていますか？と言う項目にやっていない人ほど、やっているとチェックをつけ難しいと思った。外国の評価が入ってきて、１つが幼稚園会で注目したのがSICSと言う、ラバーズ教授が作った子どもが熱中しているか。子どもの姿から園の保育を評価しようというメリットは、障害があってもなくても共通して使えるという謳い文句だった。これによってベルギーは、５カリキュラムの一つに挙げられた。ラバーズさんがうちの園に来たことがあって、私の園の保育を見て、哲学がありますねと言われた。対になって、アメリカの環境スケールエカーズという評価があり、同志社の埋橋先生が訳した。前回うちでやってみて問題があって、環境を評価する意味でいいが問題が２つあった。まずアメリカが作った国の評価なので、アメリカはあまり子どもを信じない、とまでは思わなくても、先進国の中では、子どもの権利条約を批准ができない。その国が作った評価だからびっくりしたことだが、ある評価で最初の所で×になったのが、子どもが一人で本を読んでいる時、熱中しているかについてうちは声を掛けないので、うちは×になってしまう。中坪先生が「見守る保育」を研究しているがアメリカでその話をしたら、アメリカは誰一人賛成しなかった。アメリカでは介入するのがいい先生と言うのがあり、アメリカの評価スケールは難しい。２つ目は訳した人の英語を訳す能力、自分の主観が入ると本当の元とは違うだろうとそうなってしまう。私は最近歯がゆい思いをしているのが、自分の英語力の無さ。訳した日本語から知るしかない。

―日本語訳―

遠藤先生が、日本の中でアタッチメントの研究が著名で本も書いている。愛着と言ったら、遠藤先生だがよく本を読んでみると、外国の人が書いていることを遠藤先生が訳している。遠藤先生は、ライナスがいつも毛布ばかりを持っていて、そこから研究をしているかが毛布でしている。安全間の輪も、外国人が出しているものです。情緒的利用可能性なども外国の人が出した説。それを遠藤先生は訳しているわけで、先生自身が考えを持っているわけではない。関東ＧＴで遠藤先生を呼んで講演をしてもらったが、ＧＴでは複数の愛着が必要と言い、他の会では、特定の愛着が必要ともいう。人の目を見て知るしかないときに、かなり私も、もしかしたら情報操作をされているかもしれないと思う。子どもの姿が正しいので、誰かの目を通すより現場で子どもを見れるので、子どもから見て欲しい。参考になることもあるし必要なことだが、研究者としては仕方ないが自分の分野から見て他からは見ない。どうしても自分の専門分野から見る。古希祝をしてくれるが、古希祝のために〆切があると本を書くだろうと出すが、私の本は読んでもあまり面白くない。字ばかりで、何とか整理してもらっているが64万字あって、絵も写真もない本。第１章、２章は人類学から見た保育とか、脳科学から見た保育とかずっとある。色々な分野から保育を見るとどうなのかを書いている。それを出来るのが現場。現場の良さ。赤ちゃん学会の小西先生が、人づてにだが、過大評価かもしれないが、小西先生が「いくら素晴らしい研究をしても、現場に使えない研究は意味ない」と言っていたが、それを最近「研究は、現場に使えないというのはいかにも上から目線で、研究自体が現場とやるべきだ」という話をしたと言っていた。是非、私たちはそのスタンスでしていかないといけない。ただ訳されたものではなくて、後で話してもらうが水野さんと英語が達者な先生がいるが、直接何かを調べてもらった。元がどうか。集団的敏感性も日本語として変。二者関係敏感性なら分かる。集団的敏感性はおかしい。集団を楽しくしましょうとするが、敏感性と言うのもおかしい。情緒的利用可能性も変。訳仕方によって、訳仕方でしか知りようがない。

―脳の機能拡大のグラフ①―

脳の機能拡大がある。去年の日経新聞の記事で、タイトルが時代を表している。「保育所 幼児教育の場に」保育所と書いたら、日経新聞は当然、「女性の社会進出のため」とか、「就労支援のため」と書くが、お母さんが働くために預かる場所と、経済新聞だと、そう書く。「幼児教育の場に」と書くなら、幼稚園と書くべきだが、これがギャップを表していて、

講師の長澤先生が収穫があったと言っていた。幼稚園の施設整備指針の中では、幼稚園の先生に話をしている。幼稚園の先生たちは、「教育の場ですから」と言うが、「保育園が教育を語るなんて初めて知った」と言われた。これまでの会の中で、「幼稚園より保育の方が教育を語っていることに驚いた、もっと世の中にいってくべき」と言っていた。いくら私たちが教育としていても仕方ない。
よく私が講演で示している脳の拡大のグラフ。これがまた問題だが、ＯＥＣＤが 2010 年に出し、脳の感受性がこの時期を示しているもの。情緒と言うのが英語だと、エモーショナルコントロールと言われ、自分の感情をコントロールすること、我慢したりすることだと思っているが、これを情緒と訳されると、この時期に「やっぱり情緒が大事だからお母さんといることが大事だね」となりそうで、3 歳児神話を助長するように見える。でも、これを英語で言うとエモーショナルコントロールといい、社会性はピアソーシャルスキルのことで、同僚性のことを言うとしたら、子ども同士の関係がなかったら、このグラフを読むと 1,2 歳において、子ども集団でいないといけないのだねとなる。小さい時代は親といた方がいいね、と取るか親といるといいとかでは、読み取り方が違う。ＯＥＣＤが元で、元の資料を見ると、保育指針の改定の基本になった。目の前の欲望にコントロールすること、感情をコントロールする力。指針の改定に参考に出たグラフで、こんな早い時期に身に着くのは、とても大事なことで、これから提案したいこと。人類は子どもを産み、遺伝子を子孫に残すためには、毎年生まないといけなかった。毎年産むためには、いつまでも抱っこして授乳していると生理が起きない。降ろさないと妊娠できない。次の年に子どもを産むためには、９か月くらいに降さないとだめで、人類は９か月くらいで降ろして、離乳することで、次の子を妊娠することができる。降ろされた赤ちゃんは１人で生きられない。それを可能にしたのが、人類は社会を作り、共同保育をしてきた。人類は９か月くらいで共同保育を始めたので、当然思った通りいかないので我慢する。先の見通しを立てたり、気持ちを共感したりするのは、共同保育をすることで他者認識をする。マルセロという人が９ケ月くらいで他者を認識し、　　１歳位になると他者を認識する。共同保育の中で身についてきた。共同保育は、複数の子どもがいるので、かつては家の中に子どもが複数いて、地域で子どもを見ていた。今少子化になり、これから人口が減っていくとますます母子だけが、孤立化していく。赤ちゃんは母子の中だけで育っていると脳が発達しなくなる。これが、先進国で起きている犯罪が、少子化がはじまった頃の子たちが、若者になりはじめ、エモーショナルコントロールが育っていないので、事件が起き始めている。脳の能力を拡大できるのは、乳幼児保育からしかできない。社会の中で生きていくための力。教育基本法がある。その１章の教育の目的の中に、「人格の完成を目指すこと」次に「社会の形成者としての資質を育てることが教育です」と書かれている。共同保育をしている時期から身につけているとしたら、当然０歳から教育なんです。「0 は教育ではない」と言う人がいるが、それは教育基本法を読んでいない。教育は社会の一員に育っていくことなので、当然０からも教育で、そのために子ども集団が必要なんです。ランゲージという言語は、色々な人の声を聞き、胎内でも聞き、その後、脳が拡大していく。そうするとまず、このグラフを見ると、ほとんどが 3 歳未満がピークで、3 歳未満の保育が大切だと今回の指針に特別に書かれた。「そうすると 4,5 歳では遅いですか？」と聞かれるが、「脳の可塑性があるので手遅れということはなく、脳の拡大はずっと続く、一気になくなるのはエモーショナルコントール」ということ言うが、実は情報操作をしているか分からないが、東大の研究所の遠藤先生を中心に訳されたが、ＯＥＣＤの元の資料はどうかを調べた。ＯＥＣＤの元のグラフと英語の文章は確かに、遠藤先生等が示されたグラフがＯＥＣＤに載っている。

認知的及び神経学的な科学に基づいたカリキュラム設計。認知発達科学と神経学的研究は子どもがある特定の年齢で特定のことを特定の順序で学ぶことを示しており、脳の感受性の「ピーク」は機能/スキルによって次のように異なることがある。

感情コントロールと社会性

感情コントロールの発達に対する脳の感受性は、中レベルから生まれてから１歳頃まで高水準に上昇し、４歳から低水準に低下する。同じ年齢同士の社会性は低レベルからはじまり、１歳から２歳にかけて急速に増加し、徐々に減少し４歳から中程度にとどまる。

言語と数

言語開発は中レベル程度からはじまり、1～2 歳前後で高レベルになり、4 歳に向けて若干減少し、それ以降は中と低レベルに向かって減少し続けるでしょう。数的理解は低レベルからはじまり、1 歳～3 歳まで急速に増加し、徐々に減少するが 4 歳から高水準に維持される。

―脳の機能拡大のグラフ②―

このグラフの元の人はどうしたのだろうかと思った。ネットの中で水野さんが見つけたが、これを観ると分かるが、急速に減るものがこんなにあるのに、エモーショナルコントロールしか出していない。でも実はこれを出したら、小さいうちにしか育たないものがこれだけあるので、幼稚園を否定してしまうので出さなかったのだと思う。ヒアリング、ビジョンもそれに関してこんなに早く表していて、聞いて、言葉の意味を理解して聴力が発達をしているのかは違うことを言っている。ビジョンは視覚と使わないと思う。これをエモーショナルコントロールから考えると、感情をコントロールができないかを見ると、先の見通しが立てられないことがあるので、ビジョンは先の見通しをつける力で、それがエモーショナルコントロールとくっつく。ヒアリングも気をそらす力も必要と言われているが、原始反射と言われている赤ちゃんが、反応することが意思を持っているのではないかと言われている。シンボルは象徴機能。よく言われる見立て遊び。早い時期。ランゲージとピアソーシャルスキルとナンバーは示されている。早くなくなってしまうものが多く、どういう研究なのかを元を示したものを調べている。この表を使った人がＯＭＥＰ（オメップ-世界幼児保育機構）の教授が使って、発表があったのでメールを出して聞いている。訳した人を通すと、言いたいことが分からないのでそうしている。示されたグラフを追求していくと見えて来る。

―最近訴えたいこと―

最近の訴えたいことは、最初は「環境を通して」と言うことでゾーンを提案した。今、お茶代付属までにもそうなってきている。私はその次に、これからこういうグラフを使ってスタンダート化していきたいのが乳児からの教育環境。ピークを支えているのは子ども集団で、親子の中では育たたない。ドイツでやっている方法だが、乳児から子どもの環境を考えて早く集団の中に入れたい親がいたら、いつでもその選択ができるように環境を作ること。皆さんが順にこども園になっているが、私も是非なってほしいと思うが、子どもに必要である。子ども集団の中で、子どもの育ちに必要であると受け入れる施設になってほしい。今のところ子ども園は、1 号認定と受けいれられている。3 歳以上は 1 号認定と言って、働いているかの有無にかかわらず入園できる、ただ、これが 3 歳以上から認められていないが、これを 0 から受け入れるべき。保育所は親が働いているかで入れるかではなく、脳の拡大のために入れる施設だと思っている。都内は待機児が多く、そこまで行きつかないが、過疎化してきて、入園が減ってきている地域は、この表から特区で 0 から受け入れるべきと訴えるべき。金沢は 0 号認定と言って認めているところもあるが、乳児からこういうことが必要だと、過疎地域ほど子ども集団の学びがしにくい場所。そういう所こそ、保育園の存在意義がある。少ないからこそ保育園の役割がある。働いているかどうかに関係ない。そのために、こういうグラフを使って、乳児は必要で 3 歳未満の中の集団に入れることが研究の中では、脳の拡大ができるのは家庭は 2 割。8 割は家の中では育たないと言われている。それが昨日話した人口減少になった時の保育園の役割です。ドイツでは、あんなに保育園が足りないのに、1 歳以上の子を持った親が自治体は、全ていれないといけない法律を作った。働いていないと入れないという国は珍しい。私たちは、今までは最初の頃は乳児保育は必要悪だと思っていた。園は、親のように育てようとしていたが、親と違った役割があり、その役割は人類

の進化の中で生まれてきている役割です。これが特に、京大の山極さんなどはもともと霊長類研究をしています。最近はサル化してきている。何故かというと、いつまでも抱っこしているのはサルだと言っている。人類は早くから降ろしてしまい、共同保育をしてきているので、共同保育の在り方を構築するべきと言われている。私は同時に、1号認定を0から認めるのは、0から入園させるべきと言っているのではなく、0,1歳は、1号認定は4時間保育なので、4時間くらいがいいと思っている。0歳から10何時間もいくら子ども集団が必要と言っても、そんなにはする必要はない。親子がいい距離におく手伝いをする。親と子がいい距離感にいられるようにする手伝いをするのが保育園で、01歳の時は、4時間くらいがいいと思っている。それは社会の問題。親や保育園を責めるのではなく、社会がそうなるべき。東京医大は女性の点数を操作して、入学を止めているとバッシングをされている。男女同じ点数にすると7，8割は女性が合格するが、ほとんど女医さんはやめてしまう。そうすると7,8割が女性の医学生になると、結局辞めてしまうので何で操作をするかと言うと、辞めざるを得ない社会がおかしい。これは医者だけではなく、女性が仕事を続けられない社会がおかしい。日本は女医さんの数が世界に比べて少ない。いくら働き方改革をしても難しく、社会の問題。ただ、子どもが来ればいいではなく、保育園に入れた方がいいのは、子どもを守るためと伝わらないと、自分の園を守るためにやっているのだろうと言われてしまう。明らかにです。この辺も3歳まで育休を取らせようとしているが、お母さんがいいと言っているが、実は育休を取らせるためで、0から入れる親が増えてきている。私の園でも1，2歳から入園してくる子たちは大変。そうすると園が大変。昔みたいに兄弟が一杯いればいいが、お母さんが抱っこして、コントロールされた子が来ると大変。まだまだ拡大が止まっていない部分はいいが、3歳からではつかないことが研究で分かってきている。2つ意味がある。乳児から預かることは、かわいそうと言うのはやめた方がいい。家にいた方がかわいそう。2つ目は家庭のような園になることはやめた方がいい。家庭のようにと言うのは、母子家庭みたいになってしまうので、集団保育をされてきた場に変えないといけない。親から離れるから本当の親に愛着存在が必要。いつでも面倒見て、授乳をしているから愛着と言うのはおかしい。離れないと愛着が生まれない。その中で最近の愛着兼研究が進んでいる。

なぜ乳幼児期の発達は大切なのか？包括的な回答として、「その後の人生のチャンスや健康に決定的な影響を与えるから」と言えます。主要な理由として、乳幼児期における脳と生物学的な発達は、重要な一里塚であり、非常に感度が高い時期だからです。就学までに起こる脳の発達内容のラインから見ると、就学時には、その後の人生の成功の基となる非常に多くの基礎能力が培われていることになります。

早く子ども園になることで乳幼児期の団体を一つにすること。ドイツでもそういう考え方がある。ドイツでも教育と生活局と2つあった。補助金を出すときに出しづらいし、一つにしましょうと何の概念にしようかと言ったときに、陶冶と言う概念で一つの局を作った。最初は陶冶局にしたが、スポーツ陶冶局にして、次がスポーツ教育局として国の予算をつけ、ＯＥＣＤが何軒かを辞めて、1元化して国の多くの財産を使いましょうとした。乳幼児期の大切な時期を一つにしましょうと世界では動いている、最終的に無償化になることで、最終的には乳幼児期を研究していく。教育基本法の中には学校教育法とある中で、幼児教育というものを作ったにもかかわらず、そこに子ども園も入らず内閣府が行っている。子ども相という、きちんとするべきものをつくるべき。厚生省は老人と医療でますます増えてくるし、医療で使っていて、手が廻らない。文科省の中では違う教育の中に入ってしまう。

視覚は脳の深い部分と結びつきがあり、感情抑制力とも繋がりがあると言われています。従いまして、子どもは、乳幼児期に多くの人間の顔を見ることによって、幅広くの感情を発達させ神経生物学的な側面の能力を高め、人の気持ちを読み解くことができるようになり、且つ帰属意識を発達させることができるのです。一方、ネグレクト、暴力的または精神的に苦痛な環境で育った子どもは、全く違った方法で乳幼児期の人生を過ごすことになります。脳内で異なる形での神経生物学上の繋がりができ、それらは決してその後の人生において役立つものになるといえません。

感情コントロール

うまく先延ばしできる子どもは、気をそらし、自分が経験している葛藤とストレスを和らげるために、ありとあらゆる工夫をする。意識の力を妨げられないように、楽しい空想の気晴らしを考え出して、つらい待ち時間を過ごしやすくする。乳幼児期に子どもの言語理科力や表現力が発達する理由は、ひとえに、潤沢で応答的な言語環境で育ったことにあると言えます。小学校へ入学するころには、潤沢で応答的な言語環境で育ってきた子どもは、先生の説明を聞き、理解する準備ができてきており、また返答しながら経験を自由に表現し、学ぶことができるのです。反対に、言語環境が好ましくなかった子どもは、10 語、15 言語、２0 語程度の単語が連なる文章を読み解くのにも苦労し、質問に回答する、自らの経験を表現する、あたかも自分が専門のような口調でアイデアを披露することなどの意義を理解することができません。
社会的葛藤の中で、暴力的な行為をしていた子どもが小学校へ入学すると、その暴力的な行為を減らし、排除し、また口頭のコミュニケーションを持って解決することが困難であり、代わりに落第するリスクが高まります。従いまして、すべての角度から見ても、肉体的、社会的、感情的、言語的、そして認知的な部分の発達は、その後の人生の健康、ウェルビーング、効果的学習、行動修正・習慣に欠かせないと言えます。

子どもがピーステーブルは、ここは喧嘩する場所ですと言っているが、ここは話し合う場だと言っていた。アメリカでは、こういう場所があって、ケンカテーブルと捉えているが、子どもはそうでないと言っていた。どう解決しているか、最後は笑うことだと言っていた。喧嘩の解決は笑うこと。どっちが勝った負けたではないということ共に主体であり、よかったと思える解決方法が大事。

以下に乳幼児期が大切か、その中でも特に乳児が大切と示されている。保育園の役割は非常に大事で親が見られないから代わりに観る時代ではない。

乳幼児に受けた教育が、決して修辞的ではなく、その後の人生においても影響を与え続けることを意味しています。我々は、子どもたちが生まれた時からその子どもたちの人生を追い、そこで分かったことは、良い乳幼児教育を受けていない子どもたちは、20 代になる頃には、中では学校を落第したり、10 代で妊娠したり、早い時期に罪を犯す可能性が高いということです。30 代から 40 代では、肥満、高血圧、うつ等の精神病を患うリスクが高まります。50 代から 60 代では、安静的な心臓疾患、糖尿病、その他の慢性的な病気を引き起こす可能性が高まります。そして、その後の配布ステージでは、早期老化、認知症をもたらします。要するに、乳幼児期の経験は、その後の人生の経験、ウェルビーング、効果的学習、行動修正・習慣に大きな影響を及ぼすのです。

９ケ月革命トマセロ

赤ちゃん９ヶ月を過ぎる頃から、他者を意図を持った存在として認識し、他者との三項関係を築くことによって、人間が培ってきた文化の中に参入し、その文化の中で学習することともに、文化の担い手になるのです。

人間らしさ

この頃に、他の動物とは異なった他者認識能力を獲得し、人間らしさを特徴づける精神活動に参集することができるのです。

人との関わりの中で発達する

社会の中で生きていくために、1歳の頃になると様々な社会的発達が現れる。

1. 人を助ける
2. 人に教える
3. 人と分け合う
4. 道徳規範を守るとする

脳を活性化するためにはインプットしたことをどうアウトプットするかで脳が活性化する。赤ちゃんはこれを知っているので教えたがる。これは自然と脳を活性化する機能と言われている。道徳規範を守ろうとするのも赤ちゃんはやたら正義感が強い。

誤信念理論

誤信念というやや高度な心の状態の理解であっても、注視といった乳児の「自発的な反応」を指標に使うことで、従来の定説であった4〜5歳をはるかに下回る年齢で理解している様子を示す知見が様々なかたちで報告されている。

心の理論

ヒトや類人猿などが、他者の心の状態、目的、意図、知識、信念、志向、疑念、推測などを推測する心の機能のことである。

コアノレッジ

スペルキらは、他者理解の基礎について「コアノレッジ」と考えている。そのような理解を促すメカニズムが生得的であると考えられ始めている。

感情コントロール

感情コントロールには、心の理論と実行機能が必要である。それが次第に幼いうちから備わっていくということがわかってきている。

実行機能

実行機能とは、複雑な課題の遂行に際し、課題のルールの維持やスイッチング、情報の更新などを行うことで、思考や行動を抑制する認知システム。

自己制御力

情動的、反射的、無意識的な「ホット」なシステム。認知的、内省的で時間と労力の掛かる「クール」なシステム

気をそらす

ホットな情動をクールにする方法として、気をそらすことが中心に考えられている。他から気をそらすことを働きかけられてクールにするところから、自ら気をそらす力を獲得していく。→それは、０歳時頃から行われていく。

２０世紀に行われた研究

「赤ちゃんは、外から受けた刺激や学習によって成熟する」「刺激→反応」という構図をベースに成り立っていると解釈されてきた。赤ちゃんに刺激を与えると、赤ちゃん反応を示し、学習する。「赤ちゃん白紙のキャンバスだ。刺激を与えればどんどん吸収する」

原始反射（新生児における、脊髄や延髄レベルの機能）

その機能によって行動している脊椎動物である

↓

神経系の成熟と子どもの行動は１対１で対応している。やがて大脳皮質の機能によって原始反射が抑制され、消失するようになると、中脳の成熟と関係している「立ち直り反射」といわれる運動が出始める。お座りや寝返りが出来るようになるのは、そうした大脳皮質にまで及ぶと、つかまり立ちや独り歩きなどの行動ができるようになる。

ピアジェの主張

赤ちゃんにおける原始反射を用いて、周囲とのやり取りを繰り返すことによって、次第に自分の意思で動かす運動である随意運動が発現する。

赤ちゃんにおける行動学

プレヒテルによる提案「赤ちゃんは勝手に動いている。そしてそれを“見る”ことが理解につながる」という信念のもと、行動学を赤ちゃんの研究に導入し、赤ちゃんを延々と観察することを重視した。

最近の原始反射の考え方

環境が行動を変え、それによって脳そのものも変化し、それによってまた行動が変わり、環境もまた変わるという相互的な自己組織化のシステムである。

自発運動

観察の結果：身体に触れられるなどの刺激を与えられなくても自然に起こる「自発運動」を行っている。（今まで赤ちゃんの運動と言えば原始反射であると思われていたのですが、そうではなく自発的な運動が主であり、原始反射はそれに含まれているだけであるということ）

ピアジェからプレヒテルへ

ピアジェの主張：赤ちゃんのおける原始反射を用いて、周囲とのやり取りを繰り返すことによって

育児・保育への影響

かつての保育の考え方：赤ちゃんは外から刺激によって初めて動くのだということは、赤ちゃんかを育てるには外からの関わりがなければならない。

自発的運動説：赤ちゃんは自ら動き、自ら育つのである。（赤ちゃん自ら動くことによって、他者や周囲の環境を認知する）

２０世紀後半に発見された神経科学的な２つの重要な所見

「神経細胞の自然な細胞死」と「シナプスの形成と刈り込み」その所見をもとに、ダーウィニズムが、「遺伝子によって作られた粗い神経組織が、二つの段階を経て無駄を削りつつ成長する」ということを提唱した。

２つの段階の提唱

第１段階：遺伝子によって作られた粗い神経系組織が、遺伝子によって神経細胞の細胞死は決まる。

第２段階：シナプスの刈り込は、学習と言う過程によってより頻繁に使う回路は残され、そうでない回路は淘汰される。

学習とは

常に選択と言う過程があり、どちらを選んで消したり、逆にさらに強く強化する過程が発達そのものである。そのことは、あくまでも自発的な行動でなければならないということ、自分の意思によって行われる活動こそが学習であるということ。

早期教育肯定派の人

シナプスの数が最大になる乳幼児期に、子どもの能力を伸ばすために多くの刺激を与えることが豊かな育児環境である。

早期教育の専門家の懸念

刺激が強すぎることによって、本来バランスよく行われるはずのシナプスの刈り込みに支障をきたし、子どもの脳に悪い結果をもたらすのではないかという懸念が、専門家の間で広がっている。

赤ちゃんは無力ではない

赤ちゃん学のもっとも大きな成果は、まったく無力であると思われていた胎児期から新生児期（生後一カ月まで）、乳児期（生後１年まで）の赤ちゃんにきわめて優れた能力があることを発見した。

未熟

赤ちゃんは未熟で、次第に成熟した大人になっていくという考え方が修正され始めています。特に、「社会脳」とか「心の理論」と呼ばれている分野では、赤ちゃんのころはなくて、次第にそのような力がついてくるという考え方は、見直され始めています。

天地が逆転するような説への変換

ピアジェ派：

「赤ん坊は模倣学習する」という説　⇒「赤ん坊は模倣によって学習する」⇒「模倣相手は乳児のころから必要である」

今では主流である重要な考え方

人間は、「言葉を話す生き物である」というよりも、「真似をする生き物である」「人間を他のあらゆる動物と根本的に区別するものは、しばしばその栄誉を冠されがちな言語ではなく、模倣する能力である」（スーザン・ブラックモア）

母子観

長い間、胎児と母との関係は、「2 の体、1 つの心」と言われてきた。
→「原始歩行」「新生児模倣」「生理的微笑」それは、生まれたときに親に愛情を喚起するための方法を、準備している証拠ではないかと言われている。

味覚

新生児は甘い、苦い、酸っぱい味を区別することができ、味に合わせて大人と同じような表情をするとも言われている。こうしたさまざまな表情の多くは、胎児期にすでに準備されているという。

睡眠

レム睡眠とノンレム睡眠が胎児期にすでにある。視聴覚、味覚あるいは触覚が胎児期にすでに機能していることはもはや常識となっており、胎児が、顔の弁別や母親の声を学習していることなどもわかりつつある。

最近解明されてきたその他の赤ちゃんの特性

「赤ちゃんは自己中心的で、両親や環境から社会性や道徳を学んでいく」
↓
私たちの天性の資質に「道徳観」「共感と思いやり」がある。

自己中心性

1651 年、トマス・ホッブスは、「自然の状態の」人間は、よこしまで自己中心的だと主張した。→
赤ちゃんの頃から「公平感」という「資源の平等な分配を好む性向」や、「よい行動が報われ、悪い行動が罰されるのを見たいという欲望」である「正義感」があると言われている。

―ドイツでの取り組み―

私たちが何をしようとしてるのか、ドイツはどのようなことをしているのか。赤ちゃん観の変化によって、保育が変わってきている。新しい赤ちゃん観による保育を紹介して、ゆくゆくどういう方向に進んでいくかをわかってもらえたらと思います。子ども観を通して、ドイツではいくつか取り組みをしています。その一つがオープン保育という形で、これを行うに当たって、職員が反対しました。子どもがどこへ行ってもいいとか、どの先生へいいということを反対した。その一つに乳児の保育のオープン保育を見たが、0 歳からどこへ行ってもいいというのは、愛着の考え方が真逆。特定の人という考え方を取っ払わないといけない。先生が子どものことを把握できないということがある。それをよく私の園でも 2, 3 階に分かれていて、子どものことを把握できますか？と聞かれるが、言い訳をしたくなって、見ています言いたくなるが、そうではなくて、把握して何をしたいのか。把握するということを言うが、何をしたいのか。そういう意味で、オープン保育を取り組む時に、いろいろな意見が職員から反対意見も出ました。そのために踏み切るために行ったのが、今話

した子ども観の勉強を１年半かけて行ったそうです。最近子どもはどういうものかを、職員に徹底したら、反対した理由は全て大人の都合ということが分かった。子どもは決してそういう存在ではないということが分かった。

―各国での「見守る保育」動き―

この間シンガポールへ行った時に、アイリーンさんが３つ目的があるので今度来日する。私と『見守る保育』の共著を出したいと言っている。もう１つが交換保育をしたいというので、保育士交換。基本的に英語なので、皆さんの所で英語を話せる職員に経験させたいという人がいれば、声を掛けておいてもらえるとこちらから派遣して、保育士交換の打ち合わせをしようと思います。それから見守る保育をその団体は 140 ヵ園からしているが、来年開園する園は、同時に見守る保育を取り入れたいので助言してほしいと言われていて、その園の定員 1000 名でどうやるのだろうと思っている。入口だけでも４つある。今年行った園は 500 名の定員の所へ行ったが、シンガポールは世界一学力が高いと言われていたり、トランプと北朝鮮の会談も行われ、世界的に注目されている。広さは日本で言うと 23 区内の広さ。とても安心。罰則が激しい、唾を吐くだけでも罰金、車が汚れていると罰金。ごみを捨てるのもダメ、お酒も 23 時以降飲んではいけない。一番気を付けないといけないのは、知らない人はこの荷物持ってもらえますかと持っている中に麻薬やピストルが入っていただけで殺されてしまう。それから韓国も来てほしいということもある。この前、鹿児島から上海まで１００分と書いてあった。国際線は機内食も出て、映画も最後まで見れない。色々な国を知ることで、日本の方向を知るにはいい。これからどういう方向を知るのにもいい。

―最近の就職事情―

色々な取り組みをしようとしている。学生さんが就職するのが変わって来た。大学へ行くと、夏前までに企業に行ってしまうと言われていた。今年行ったら、夏前に行ったらほとんど決まっていなくて、園をよく選ぶようにと言われていた。そのほとんどがブラックだと先輩から聞いて、いかないようにして、先生からの勧めもありよく選ぶようになっている。仙台の先生の努力もあると思うが、見守る保育をしている園に就職したいと言ってきている。うちの園でも面接もあるが他にもこんな園があると紹介したい。そのためには資格がいる。ＧＴでは紹介を正式にしたいと思って紹介業の資格を取って事務所を持っている。その中で無償か有償かで、今無償にしている。ただ今後はＧＴとして、私たちはやりたいこともあるので、もし成立したら１０万くらい貰った方が頼みやすいかなと思って正式にしようと思っている。一人ほしいということがあればこちらで面接して、地域に希望があれば紹介して、会って成立してＧＴも色々な事業をしようとしているのでそこに頂けたらと思っている。具体的な人を言ってもらえたらと思っている。保育をしたい学生さんにいい園を紹介したい。

―ＧＴでの活動―

具体的に園をどう作っていったらいいか分からないということで、『見守る保育』の２章のところを臥竜塾生が判断して、こんな環境用意していますか？異年齢を見れる環境がありますか？と言う項目に対して全てできていたら初級をあげて、環境だけでなく中級と言う資格を作ってみようと小さな科学者から考えた。皆さんの中の職員の中で環境マイスターにしたいと思ったらエントリーしてもらって、やり取りをしながら初級レベルをやってみようかと思っている。園には環境マイスターがいますと言えれば、そういう環境が出来ていると思いますので、具体的な活動として入れていこうと思っている。私が提案したいのは理念であるが、それは限界があるので、現場で悩んでいることもあるので少しでもお手伝い

が出来たらと思っている。一緒になってそれがいいね、と園に戻ってすぐに冷めてしまうのではなく、行動としてレベルアップできるような取り組みとして２つ考えているので、皆さんからも発信してもらって、子どもたちが幸せになるのと同時に保育者が楽しいな、この仕事をしていて素晴らしいことだと実感できるように進めていきたいと思っている。社会全体が平和で、民主的な社会を目指して、保育を進めて行けたらと思っている。思いがけず多く参加して頂いて、私は嬉しく思っている。個人的に伺うこともあると思うが、自分なりに保育を展開し発信して、ＧＴの園は質が高いと言われると嬉しい。そういう噂が流れるよう、お互いに勉強をしていきたい。

―保育所保育指針について―

保育指針の話をするとき大きく２つ入れ込んだのが乳児の大切さ。特に未満児。前提として経営者なので分かっていると思うが、指針に書かれている乳児は、誕生日が来ている０歳児のこと。０歳児クラスのことではない。誕生日が過ぎたら１歳以上３歳未満の所を見ること。指針は日本においては、満年齢のことを言っている。育休制度が２歳まで増えているが、育休は増えてもいいが、働かなくても預けられるといいと思うが、一般の人は１歳まで育休が取れると１歳児クラスがいらなくなると思っている人がいるが、４月当初の年齢なので、１歳まで育休を取りましょう。７月生まれだから８月に入れましょうとなると、１歳になったから１歳児クラスではなく、０歳児に入れるのが海外とは違う。日本の年齢別は年度別。

―異年齢保育について―

私が提案する異年齢は、年度をまたがっても子どもの発達を優先しましょうということなので、日本の言葉の共通的なものはない。乳児の大切さと小学校との連携のことを話したが、異年齢児を大事にするのではなく、課題によって決める。七夕の飾りを作りましょうとなったら、飾りを作ることで何かの発達をさせる。ハサミを使いましょうとしたら、七夕の飾りを作るのがいやだったら、別の所でさせればいいだけの話。もう１つが発達は連続性と順序性があるので、年長だからと言って、全員が難しいのを作らせるのはおかしい。年長さんでも、直線切りしか切れなかったら、直線切りで作れる飾りを作る。その子が何を作らせるか。一人ひとりを見たら、年度をまたがる可能性がある。散歩へ行くときも、歩く喜びを味合わせようと思ったら、０で行く１で行くということではなく、ドイツではそれを年齢別と言い、日本では異年齢別と言う。子どもは評価の中にあるように真似ることがある。真似ることは人類にとって有効な学習だとしたら、少し上の子を真似ること。赤ちゃんが必至でハイハイをしている。先生がそれを動画で撮って、這いながらタオルを持っている。必死に袋にしまおうとしている動画を中国の人から見たら、どう仕込んだのかと言われた。「簡単です、見てまねることです。」そういうのを見て、真似してすごいですね、そこまで先生がしまってしまったら出来ないと子どもは言う。出来るのに先生が先にやってしまっているだけ。担当性で３人だけ見ていたら、そんな姿は見られない。這っていった先の先生が見てくれたり、遊んでいると見てくれることを保障する。

―愛着について―

担当性の考え方、新しい愛着の考え方です。遠藤先生は複数の中を子どもが選択する可能性がある。遠藤先生は重さがあるという。男性がダメな赤ちゃんがいて、入園してから抱くと泣いてしまう。その子に試練があって、父親保育という日があり、父親に囲まれて泣いていて、赤ちゃんは這っていったところが、普段抱かれると泣いている男性保育士の所で、俺の所でいいの？とびっくりしていた。普段は優先順位が低い先生が、この日は優先順位が上がった。どの人に行けばいいか使い分けている。上の子を見て、真似しているのだと思う。先ほどの赤ちゃん観ではないから、小さいうちからできることが分かってきている。そのためには、子どもを信じないといけないですし、職員同士お互い信じていないといけない。私たちが赤ちゃんの有能なことを発信すること。昔の異年齢は、発達が違う子と一緒にさせていたイメージがあったが、私たちは発達が同じ子同士を入れる子だと考えている。間違った異年齢が多いので反対するが、私たちはそうではな

く、子どもを中心によく見て、発達を促すのは卒園するだけの姿が描かれるようになった。それが取っ払われてこういう姿にしていきましょうとなった。そこまでの連続性を踏まえていかないといけない。ドイツでは、ほとんど保育士が書く書類はなく、卒園するまでにどんな発達になったかをチェック書類しかない。月案やお便り帳はなく、卒園するときにどんな発達を遂げたかしかなく、学校には伝えない。伝えてはいけないという法律があり、学校の先生は自分の目で見て、考えるようにと言うことがある。

―これからについて―

まだまだ課題はあるが、少しずつ私たちがやっていることが時代が追い付いてくると言ったら変だが、時代もそうなってくると思うので、実践を積み重ね発信をしていけたらと思う。ストレスがないので、行きたいところへ行きなさいと妻から言われている。夏の２週間体調を崩していたのは、どこへも行かなかったから。歳をとって家にいると２、３時間しか寝れない。食欲もどこかへ行くと出てくる。その変わり、猛烈サラリーマンみたいではなく、ゆっくり泊まっていきますので、呼んで頂けるときは温泉を取ってくれたらと思う。自分の体調も気をつけながら、ただ頑張れば立派なわけではないので、その中に保育と言う仕事が、人を豊かにする気持ちで保育をしてもらえたらと思う。日本も前へ前へから、成熟した社会に保育からしていけたらと思う。今後も助け合ってみんなで協力していきたい。何かあったら声を掛けて、保育を楽しんでいきたいと思っています。お疲れ様でした。

本稿は、2018 年 8 月 21 日に行われた GT サミット 2018 の内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）